２０２３年４月２３日（復活節第３主日、A年）
牧師メッセージ
「二人の目が開け、イエスだと分かった」
（ルカによる福音書24:13-35）

司祭ヨセフ太田信三

エマオへの道中、二人の弟子はそれまでに起こった出来事について語り合っています。自分たちが見た主イエスの受難と死、そして空であった墓の出来事の意味を理解しようと、互いに意見を交わしていたのかもしれません。この二人に、ご復活の主イエスが現れ、共に歩き出します。しかし、二人の目は遮られていました。彼らは主イエスの死という圧倒的な現実に直面し、「死」に囚われていました。彼らの目が遮られていたのはこのためです。そんな彼らには「復活した」という天使の声は聴こえるわけもありませんでした。目の前に復活の主イエスがいてくださっても、分かるはずもない。エマオへの途上、その彼らの話に主イエスは黙って耳を傾けます。そして主イエスは、「物分りが悪く、心が鈍い」と言って、彼らの頑なな心を嘆かれました。しかし主イエスは、心の鈍いこの弟子たちを見捨てることはありませんでした。主イエスは彼らに伴い、目を開くのです。今日のみ言葉では、ここから物語の主役が変わります。これまでは、二人の弟子たちが語りの中心でしたが、ここからは主イエスが二人を導きます。死に留まる者から、命を与える者へと物語の主役が代わるのです。

主イエスは二人に聖書を語り聞かせます。それは、創造に始まる、神が人に命を与えた話、神が人を愛し抜かれた話です。死に囚われていた彼らのまなざしが、命を与える神の救いへと向けられていきます。死に留まっていた彼らの心に再び光が灯され、彼らの心が再び燃えるのです。この主イエスの話を聞き、心燃えた二人の弟子は、先へ行こうとする主イエスを無理に引き止めます。しかし、まだ彼らの目は遮られていました。み言葉を聞いて感動しているだけでは、心燃えているだけでは目は開かれないのです。遮られていた二人の目は、主イエスが共に歩いて、聖書の説明をし、共に食卓についてパンを裂いたときに開かれ、ご復活の主イエスを見たのでした。ご復活された主イエスに出会うことができるのは墓ではなく、み言葉に耳を傾け、裂かれたパンを共に食すときだったのです。こうして彼らは、失望のうちに下ってきた道を、今度は希望をもって上って行きました。そして起こったことを仲間に知らせました。

わたしたちも信仰の道を歩むなかで、共にみ言葉を聞き、共に語り合うとき、そこに主イエスがいてくださいます。今日の福音書が描かれた聖画は多くあります。それだけ共感する画家が多かったからではないか、とわたしは思います。スイスの画家ロバート・ズンド作『エマオへの道』は、二人の弟子の真中を白い衣の主イエスが歩いている絵です。この絵の真中の主イエスを隠してみると、わたしたちのリアルな現実があるように感じます。わたしたちが誰かと語り合っているとき、わたしたちが礼拝を通して共にみ言葉を聞き、パンを裂いて共に分かち合うとき、ご復活の主イエスは共におられます。